

暁鐘の音

64

囚人のジレンマ

ゴールデンウィークを明けたころから、地図のコピーを片手に数人単位でリクルートスーツに身を包んだ学生の姿を目にする。さすがに最近ではその数は減ったが、その分、彼らも場慣れした観がある。

毎年、この時期になると「青田刈り」という言葉が回って問題となる。この「SCDだより」でも以前に一度取り上げたことがあるが、今年少し様子が違う。「青田刈り」が意外と問題になっていないのが気にかかる。おそらく「就職氷河期」を考えれば、そのような活動をせざるを得ない学生に対しても同情的にならざるを得ず、とても「青田刈り」を非難する訳にはいかないのだらう。

企業業績が上を向き始めたと言っても、そのほとんどはリストラによる効果であって、本来の意味での生産性が向上したわけではないし、新規企業も殆ど起きていない。したがって新規採用面に波及するには、もう少し時間がかかりそう、学生達にとっては、まだまだ「氷河期」の実感なのだろう。彼らの表情からもそれが窺える。

彼らもこのやり方がいいとは思っていないだろうが、完全に「囚人のジレンマ」に陥っているようである。

周りに積極的に就職活動をして、会社側に「熱意」を示している学生がいる限り、この活動が不合理極まりないものであると感じていても、そこから自分だけ離脱することが出来ず、結局は自分も同じような活動をせざるを得なくなる。「囚人のジレンマ」は囚人達で解決することが出来ないように、この状態は彼ら学生たちでは解決のしようがない。

昨年も、三〇社を越える企業を訪問した学生を何人か知っているが、今年も多くの学生がそれを覚悟しているのかと思うと、遣りきれない思いがする。この間、大学の授業は欠席しているのだろうか。たとえ出席していても授業に身が入らないだろう。人によっては毎日講義をとっていかないかも知れないが、それでも普通の学生にとって、四年のうちの後半の二年といえ重要な時期のはずである。その内の1/4、1/2を就職活動に投入していることになっってしまう。それでも卒業できるとすれば、よっぽど優秀な学生なのか、卒業の条件が甘いとか言い様がない。その意味では大学も舐められたものである。一体、「大学」の役目は何か？大学の誇りは何処に行っただのか？

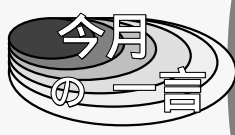
なことが。誰がこの損失を数字にして発表してもらいたいものか。大学で、基礎的な知識や技術を身に付けてくれていけば、企業側ではその上の部分の教育を実施すれば済むのに、これでは何時までも入社してから初歩的な研修を実施しなければならなくなる。これも「国」全体で見れば、実に大きなムダである。まるで国中がコスト意識を喪失している。企業だって何時までもこのような初歩的な研修を実施し続けることは出来なくなる。今や「大学は白地の学生を送りだしてくれればいい」という時代ではない。

終身雇用や年功賃金といったこれまでの制度が変化し始めている中で、企業側もその方向を見据えて、雇用形態や採用方法を見直す時期にきている。また、経済のグローバル化といった企業を取り巻く環境も大きく変化し、求められる人材も今までとは変わってきているはずである。企業側も、授業を放り出して、朝一番に会社を訪問する「熱意」を能力と勘違いしてはいないだろうか。確かにその種の「熱意」が有効であった時期もあったが、これからは果たしてその種の「頑張り」だけでやれる時代だろうか。国全体のコストが高くなってしまった今日では、各目の活動コストを無視したまま頑張り続けるわけにはいかない。

「頑張り」のために個人を犠牲にし、家庭を犠牲にできた。その結果、今や全く疲弊し、目指してきたところに「幸福」はあるのだろうか。疑問を抱き出している。そして採用する側も、そのことに気付いているはずなのに、方針を変えることが出来ないのはなぜか？もしかすると、採用する側も「囚人のジレンマ」に陥っているのではないか？だとすれば、恐ろしいことにこのジレンマは誰も破れないことになっってしまう。

「今年の新社員は、デートをキャンセルしても残業する」この種のアドバルーンは、双方を何時までも「囚人のジレンマ」の中に閉じ込める役割をする。やっとの思いで入社した大企業から逃げださないように「檻」に閉じ込める効果がある。

「群衆中の個人は、単に大勢の中にいるという事実だけで、一種不可抗力なものを感ずるようになる」(仏)ギユスターヴ・ル・ボン



一般に、各人の分担や役割が細かく分けられることで、「責任」の所在が曖昧か、自分に責任がないと思えるときは、容易に理性の番は抑えられてしまう。国会議員の人の行動も、大勢の「仲間」の中に居るときは、普段はとも想像できないような言動を見せられてしまう。一人のときはまともな「意見」を披露するのに、国会の中の「自分たちの集団」の中に入ってしまうと、まったく別人になっってしまうようである。

先の国会の会期中に起きた「座り込み」での小競り合いで、その凄み方が暴力団も顔負けの場面が、テレビの画面に移したされたのは記憶に新しい。

中央官庁の上級役人も、休日、家に居るときは意外と「普通のおじさん」だが、月曜日の朝、電車を降り

て職場に向かって歩いていく間に「役人」に変化する。

「会社」の名前を背負ったときも、簡単に情報の不正授受に荷担してしまふことがある。そこには本人の「意思」とは別に、あがない切れない不可抗力的な力が加わる。そして気がついて見れば、市長に賄賂を贈る役を請け負っているのである。自分はその計画を立てたわけではないし、金品を調達したわけでもない。ただ、用意されたものを贈り届けただけであるといつことで、「責任」が勝手に薄められ、そのことが理性の出番を遅らせるのである。

人間は基本的には弱い生き物なのだろつと思ふ。哲学はその弱さを補うものであろう。しっかりと人生観、倫理観がなければ、群衆のなかに棲む不可抗力という怪物に抵抗することは難しい。